

マネースクエア四季報(2025/1)

2025年6月までの為替相場展望

「マネースクエア四季報」は、3カ月ごとに向こう6カ月の為替相場見通しを提示。四季報配信月を除く月末のマンスリー・アウトルックで見通しをアップデート、ウィークリー・アウトルックやその他のレポートで見通しに関わる相場材料を分析・解説します。

※次週12月30日はウィークリー・アウトルックを配信する予定です。

25年の最大のテーマは、「**トランプ 2.0 で何が起きるか**」。トランプ氏の選挙公約は、トランプ減税の恒久化、法人税率引き下げ、関税引き上げ、移民規制の強化など。今回も『MAGA(アメリカを再び偉大に)』をスローガンとしたように、やろうとしていることは1期目とほぼ同じです。議会の上院と下院も同じ共和党が多数派となるトリプル・レッドが実現したため、トランプ大統領が自身の政策を推進しやすい状況でしょう。

25年6月までの予想レンジ

通貨ペア	直近終値(12/20)	予想レンジ
米ドル/円	156.310	140.000 ~ 160.000
ユーロ/円	163.030	150.000 ~ 170.000
ユーロ/米ドル	1.04300	1.02000 ~ 1.15000
ユーロ/英ポンド	0.82975	0.80000 ~ 0.88000
英ポンド/円	196.480	180.000 ~ 203.500
英ポンド/米ドル	1.25700	1.20000 ~ 1.35000
豪ドル/円	97.709	91.000 ~ 105.000
豪ドル/米ドル	0.62510	0.55000 ~ 0.70000
豪ドル/NZドル	1.10600	1.05000 ~ 1.13000
NZドル/円	88.348	84.000 ~ 96.000
NZドル/米ドル	0.56521	0.50000 ~ 0.62000
カナダドル/円	108.860	100.000 ~ 115.000
米ドル/カナダドル	1.43590	1.30000 ~ 1.47000
トルコリラ/円	4.441	3.800 ~ 5.000
南アフリカランド/円	8.539	7.500 ~ 9.200
メキシコペソ/円	7.786	6.800 ~ 9.000
ノルウェークローネ/スウェーデンクローナ	0.97500	0.93000 ~ 1.08000

※予想レンジは、担当者個人がファンダメンタルズ分析やテクニカル分析などを基にして独自に判断したものであり、予告なく変更になる場合があります。
※最終的な投資判断はご自身で行っていただきますようお願いいたします。

25年6月までの予想レンジ

銘柄	直近終値(12/20)	予想レンジ
日本N225(円)	38,805	35,000 ~ 43,000
米国D30(ドル)	42,756	40,000 ~ 46,500
米国NQ100(ドル)	21,224	17,000 ~ 23,000
米国SP500(ドル)	5,926.4	5,300.0 ~ 6,450.0
英国F100(ポンド)	8,103	7,800 ~ 8,700

※予想レンジは、市場調査課が独自に判断しており、予告なく変更になる場合があります。

※最終的な投資判断はご自身で行っていただきますようお願いいたします。

16年大統領選挙ではトランプ氏の公約を織り込む形で、米ドル高や米株高、いわゆるトランプ・ラリーが発生しました。ただし、17年1月にトランプ大統領が就任すると、米ドルは下落基調に転じました。トランプ大統領の対外強硬姿勢が米ドル離れを引き起こしたこと、米FRBが利上げを進めるなかでも、長期金利が低下したことなどが背景でした。

トランプ大統領1期目と大きく異なる点があります。それは景気循環や金融政策の位相です。1期目のスタートは、米経済がリーマンショック後の長い低迷から立ち直り始めた局面でした。15年末に9年ぶりの利上げが実施され、本格的な利上げは16年12月以降、まさにトランプ政権1期目の前半と重なりました。今回は、22年春から23年夏までに大幅な利上げが実施され、24年9月からは利下げへと転換しています。

今後も米景気の拡大は続くでしょうか。減税や規制緩和は景気刺激効果が期待できそうです。一方で、インフレの再燃や財政赤字の拡大による長期金利の上昇、関税引き上げによる世界貿易の縮小、それらは景気失速をもたらすかもしれません。

トランプ氏の公約のうち、何がどんな形で実現するか、そして何を実現しないか。トランプ大統領が極端な政策を打ち出そうとした時に、閣僚や議会がブレーキをかけることができるか。それらを見極めることが重要となりそうです。

米経済に想定される3つのシナリオは以下の通り(詳細は『大予想』2025年の為替・株の「マクロ経済の相場環境」をご覧ください)。

メインシナリオ:ソフトランディング(筆者の定性判断による生起確率45%)

米国がソフトランディングを実現できれば、景気低迷に喘ぐ欧州との差が欧州通貨に対する米ドルのアドバンテージとなりそうです。また、市場は総じてリスクオンの地合いが想定され、資源価格や新興国通貨にとって比較的良好な環境と言えそうです。日銀にとっても金融政策の正常化を進め易い環境かもしれませんが、利上げは限定的となり、内外金利差が引き続き「円安」要因として意識されるでしょう。

サブシナリオ:リセッション(同上30%)

世界的に景気が低迷するなか、資源価格は下落し、またリスクオフの地合いが資源・新興国通貨にと

ってマイナスとなります。日本も金融政策の正常化を先送りせざるを得なくなります。ただ、リスクオフに伴う「質への逃避」や資金還流が円を支える構図はみられるかもしれません。

サプライズシナリオ:ハイパー景気(同上 25%)

トランプ大統領が選挙公約の実現にまい進するケースでは、市場のセンチメントは不安定になり、米ドルや株価、市場金利(債券価格)は乱高下します。このシナリオが実現した場合は、しかるのちにサブシナリオ(リセッション)に変異する可能性が高まります。

◇2025年6月までの主なイベント:

- 1月2日 米デットシーリング(連邦債務上限)復活
- 1月20日 米トランプ大統領就任
- 2月23日 ドイツ総選挙
- 3月中旬 春闘集中回答日
- 4月13日 大阪・関西万博開幕(10月13日まで)

米ドル/円:140.000円~160.000円

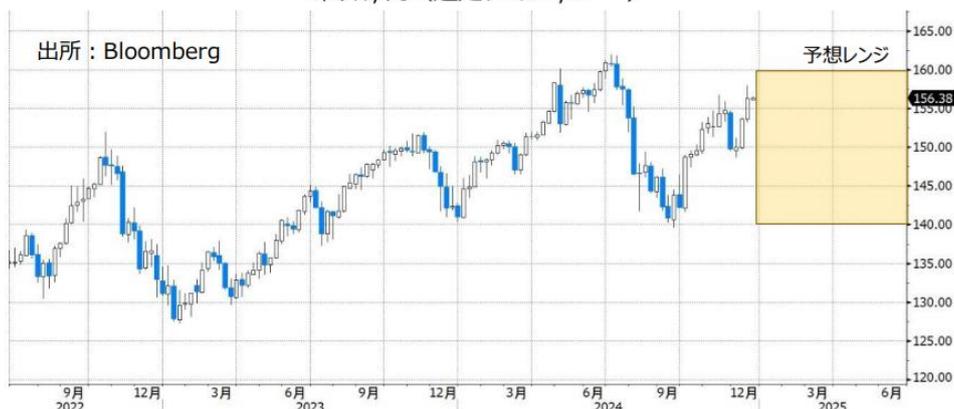
25年6月までの米ドル/円は24年年間とほぼ同じ140円~160円のレンジでの推移が想定されます。米経済がソフトランディングを実現できれば、米ドル/円は160円に向けてジリジリと上昇しそうです。ハイパー景気のシナリオでは早い段階で米ドル/円の上昇が進むかもしれません。ただし、いずれの場合でも160円を超える動きには本邦当局による米ドル売り円買い介入の可能性があります、市場もそれを警戒するでしょう。

一方で、リセッションのシナリオでは、米FRBがアグレッシブな利下げを進めることで、米ドル/円には下落圧力が加わりそうです。もっとも、本稿執筆時点で市場が予想するように日銀が6月までに1回0.25%の利上げにとどめ、あるいはそれすらも困難になる状況では、米景気の落ち込みがよほど大きくならない限り、140円を超える「円高」の可能性は低そうです。

引き続き米長期金利(10年物国債利回り)が重要なカギを握りそうです。トランプ政権の誕生に向けて債券市場のセンチメントは弱気に傾いているようです。長期金利が上昇する、あるいは4%台後半を維持するならば、米ドル/円のプラス材料となりそうです。ただし、財政赤字拡大の懸念から長期金利が上昇する場合は、「悪い金利上昇」と判断されて米ドル/円に下落圧力が加わる可能性にも注意は必要でしょう。

どのシナリオにおいても、為替相場のボラティリティ(変動)は大きくなりそうです。トランプ次期大統領の発言や行動が予測不能であり、市場が想定外の事態に直面する可能性もあるからです。トランプ次期大統領によるSNSなどの発信が頻発しそうな現地時間の夜、日本時間の午前中にはとりわけ注意が必要かもしれません。<西田>

米ドル/円 (週足、2022/7-)



ユーロ/円: 150.000 円~170.000 円

ユーロ/米ドル: 1.02000 米ドル~1.15000 米ドル

ユーロ/英ポンド: 0.80000 ポンド~0.88000 ポンド

米 FRB や BOE(英中銀)が利下げに慎重な姿勢をみせる一方で、ECB は積極的に利下げを進める姿勢をみせています。3 会合連続(通算 4 回目)の利下げを決定した 12 月理事会後の会見で、ラガルド総裁は、景気は足もとで勢いを失いつつあり、リスクは下振れ方向にあると認めました。また、トランプ次期大統領の関税引き上げ方針など貿易摩擦にも懸念を表明しました。ラガルド総裁は一方で、インフレとの戦いはまだ完了していないとしつつも、インフレ率は 25 年に 2%に落ち着くと自信を見せました。

12 月 20 日時点の OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、25 年 6 月までの 4 回の理事会で市場は 0.25%×4 回分の利下げをほぼ完全に織り込んでいます。

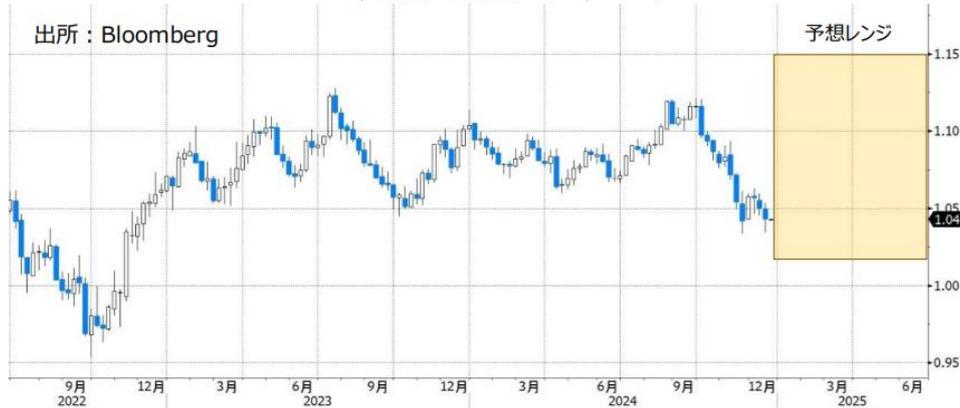
ECB と米 FRB との金融政策の差を基にすれば、ユーロは対米ドルで軟調に推移しそうです。ただし、米国がリセッション(景気後退)入りするなどして、FRB の利下げペースが速まるようであれば、ユーロは相対的に有利になるかもしれません。また、ECB と BOE(英中銀)の予想利下げペースにも差はありますが、英国景気の低迷を前提とすれば、ユーロ/英ポンドの下落余地はやや小さめかもしれません。

<西田>

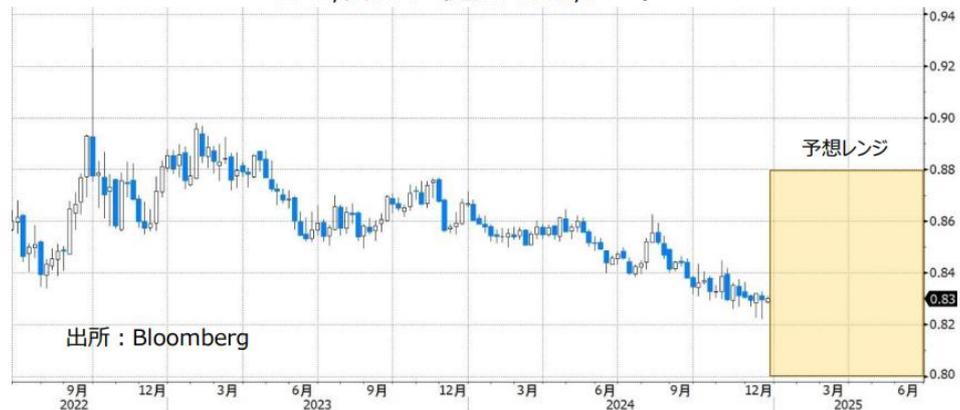
ユーロ/円 (週足、2022/7-)



ユーロ/米ドル (週足、2022/7-)



ユーロ/英ポンド (週足、2022/7-)



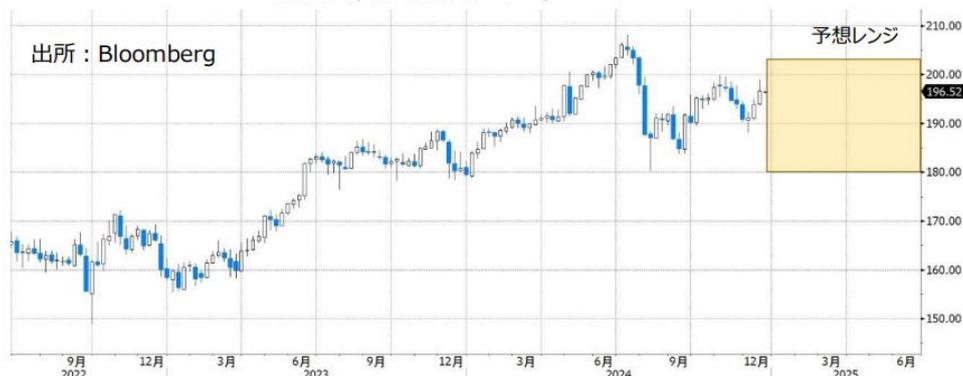
英ポンド/円:180.000 円~203.500 円

英ポンド/米ドル:1.20000 米ドル~1.35000 米ドル

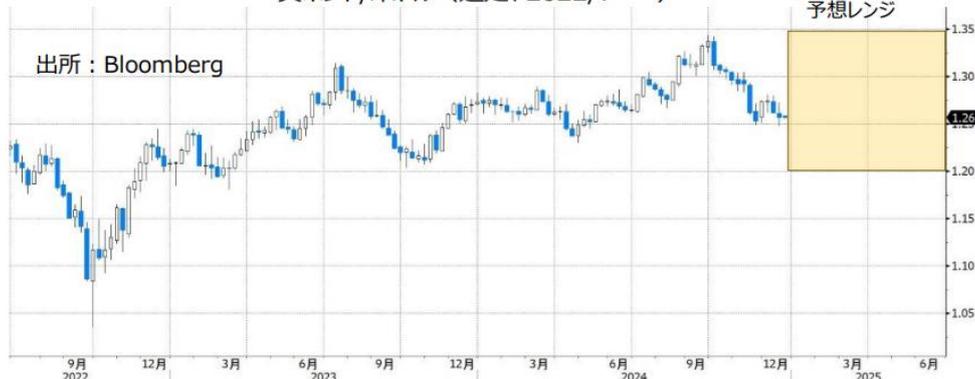
英国は 23 年後半のリセッション(景気後退)からいったん脱したものの、足もとで再び景気が低迷しているようです。24 年 9 月と 10 月の月次 GDP はいずれも-0.1%とマイナスでした。6 月と 7 月は横ばいだったので、6 月以降で GDP がプラスだったのは 8 月(0.20%)のみです。また、総合 PMI は 8 月をピークに低下基調にあり、12 月(速報)は前月と同じ 50.5 と、辛うじて景気の拡大を示唆しました(50 割れで景気縮小を示唆)。

BOE(英中銀)は景気への懸念を強めつつも、インフレ改善の遅れから利下げには慎重です。12 月の MPC(金融政策委員会)でも政策金利を 4.75%と主要中銀の中では高い水準に据え置きました。ただし、決定は 6 対 3 で、3 人が利下げを主張したことが明らかになっています。12 月 20 日時点の OIS(翌日物金利スワップ)に基づけば、市場が織り込む 25 年 2 月の利下げは 7 割弱。同 6 月には追加利下げがほぼ 5 割織り込まれています。今後の状況次第では、追加利下げの観測が高まり、英ポンドの重石となる可能性もありそうです。〈西田〉

英ポンド/円 (週足、2022/7-)



英ポンド/米ドル (週足、2022/7-)



豪ドル/円: 91.000 円 ~ 105.000 円

豪ドル/米ドル: 0.55000 米ドル ~ 0.70000 米ドル

豪ドル/NZドル: 1.05000NZドル ~ 1.13000NZドル

RBA は 23 年 11 月に 0.25% の利上げを行った後、24 年 12 月まで 9 会合連続で政策金利を 4.35% に据え置きました。

前回 24 年 12 月の政策会合では、RBA のタカ派的な金融政策スタンスが変化したことが示唆されました。RBA は 12 月会合時の声明で、従来の「何も決定しておらず、何も排除していない(利上げする可能性もある)」と「政策は十分に景気抑制的である必要」を削除し、「理事会はインフレ率が目標レンジに向かって持続的に推移しているという、ある程度の確信を得つつある」としました。将来の利下げに向けた地ならしとの解釈ができます。

市場では、早ければ 25 年 2 月の会合で利下げが行われるとの観測があります。FRB(米連邦準備制度理事会)や ECB(欧州中銀)など日銀を除く主要中銀の多くが利下げを行うなかで、RBA は政策金利を据え置いてきたこともあり、実際に利下げが行われた場合のインパクトは大きくなるかもしれません。

豪ドル/米ドルについては、FRB の利下げペースも重要です。FRB の利下げペースが緩やかならば、豪ドル/米ドルは軟調に推移する可能性があります。

日銀はいずれ追加利上げを実施すると考えられます。ただその場合でも、日銀の政策金利の水準が RBA と比べてかなり低い状況に大きな変化がなければ、金融政策面から豪ドル/円はそれほど下落しないかもしれません。

【豪ドル/NZドル】

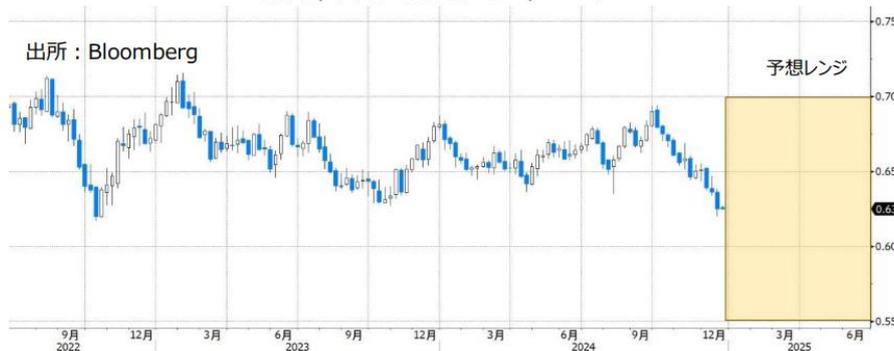
RBNZ(NZ 中銀)が積極的な利下げを実施する一方で、RBA は政策金利を据え置き続けたことが、豪ドル/NZドルを支援してきました。

今後は、RBNZ の利下げペースは鈍化する可能性がある一方で、RBA は利下げを開始すると考えられます(*RBNZ の金融政策の詳細は NZドルの項をご参照ください)。実際に RBNZ の利下げペースが鈍化して RBA が利下げを開始すれば、豪ドル/NZドルは下落する可能性があります。〈八代〉

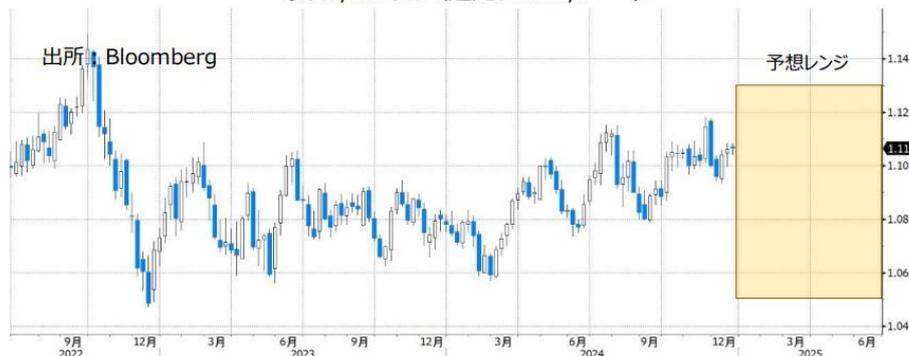
豪ドル/円 (週足、2022/7-)



豪ドル/米ドル (週足、2022/7-)



豪ドル/NZドル (週足、2022/7-)



NZドル/円: 84.000 円~96.000 円

NZドル/米ドル: 0.50000 米ドル~0.62000 米ドル

RBNZ(NZ 中銀)は 24 年 8 月に利下げを開始し、11 月まで 3 会合連続で利下げを実施。利下げ幅は 8 月が 0.25%、10 月と 11 月が 0.50%でした。

前回 24 年 11 月会合時の声明では、「経済状況が予測通りに推移し続ければ、25 年初めに政策金利をさらに引き下げることができる」と予想している」とされ、追加利下げが示唆されました。

これまでの積極的な利下げによって政策金利は RBNZ が中立金利(景気を過熱も冷やしもしない政策金利の水準)と推計する 2.5~3.5%のレンジ上限に近づきつつあります。利下げペースはいずれ鈍化すると考えられます。実際に RBNZ の利下げペースが鈍化すれば、金融政策面からの NZドル安圧力は緩和する可能性があります。

NZドル/米ドルに関しては、FRB の利下げペースも重要です。FRB の利下げペースが緩やかな場合、米ドルが全般的に強含んで NZドル/米ドルは上値が重い展開になりそうです。NZドル/円については、日銀の追加利上げのペースが緩やかならば、それほど下落しないかもしれません。日銀と比べて RBNZ の政策金利がかなり高い状況に大きな変化はないとみられるからです。〈八代〉



カナダドル/円: 100.000 円～115.000 円

米ドル/カナダドル: 1.30000 カナダドル～1.47000 カナダドル

BOC(カナダ中銀)は24年6月に利下げを開始し、12月まで5回連続で利下げを実施しました。利下げ幅は6月・7月・9月が0.25%、10月と12月が0.50%でした。

前回24年12月会合時のBOC声明では、従来の「政策金利はさらに引き下げられると予想している」が削除され、「政策金利のさらなる引き下げの必要性を会合ごとに判断していく」になりました。マックレムBOC総裁は会合後の会見で「経済がおおむね(BOCの)予測通りに推移すれば、金融政策へのアプローチはより緩やかになると予想している」と発言。今後の会合で利下げを見送ることもあり得ることや、利下げするとしても幅は0.50%よりも小さくなることが示唆されました。

市場の金融政策見通しを反映するOIS(翌日物金利スワップ)によると、BOCの政策金利は25年12月時点で2.75%との見方が有力です(24年12月20日時点)。仮にこの通りになるならば、BOCの政策金利はあと0.50%引き下げられることとなります。

24年終盤の米ドル/カナダドル上昇は、FRBとBOCの利下げペースの差が主な要因と考えられます。FRBとBOCの政策金利差の拡大に歯止めがかかれば、金融政策面からの米ドル/カナダドルへの上昇圧力は緩和しそうです。

トランプ米次期大統領の政策には注意が必要です。トランプ氏は、25年1月20日の大統領就任後ただちにメキシコとカナダからの輸入する製品すべてに25%の関税を課す考えを示しています。実際に対カナダ関税が発動されるのかどうか注目です。対カナダ関税が発動が見送られた場合、カナダドル高材料になりそうです。〈八代〉

カナダドル/円 (週足、2022/7 -)



米ドル/カナダドル (週足、2022/7-)



トルコリラ/円: 3.800 円～5.000 円

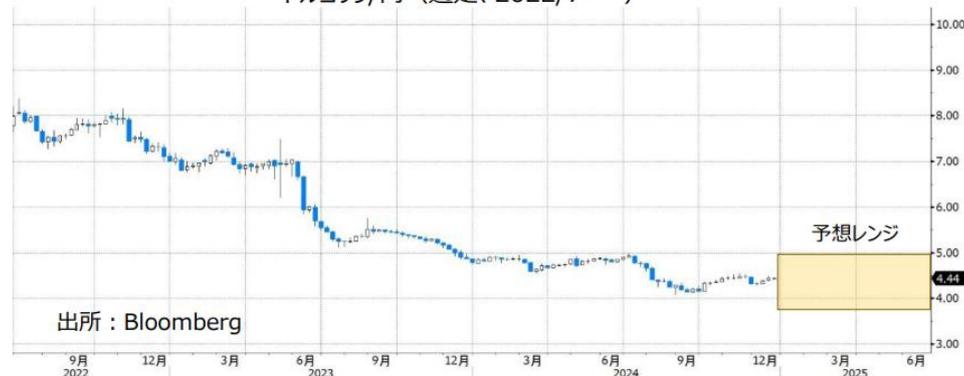
TCMB(トルコ中銀)は 24 年 3 月に利上げを実施した後、11 月の会合まで 8 回連続で政策金利を 50.00%に据え置きました。

トルコの CPI(消費者物価指数)上昇率は 24 年 5 月の前年比 75.45%をピークに鈍化しており、11 月は同 47.09%でした。高金利の影響によってトルコ経済は減速しており、トルコの GDP(国内総生産)は 4-6 月期と 7-9 月期にいずれも前期比マイナス 0.2%となり、簡便的にリセッション(景気後退)の定義とされる 2 四半期連続のマイナス成長となりました。

市場では TCMB は 12 月 26 日の会合で利下げを行うと予想されています。本稿執筆時点で 12 月会合の結果は判明していませんが、仮に利下げが実施された場合、25 年の利下げペースがどうなるのかが注目されます。TCMB が積極的な利下げを続ければ、トルコリラが軟調に推移する可能性があります。

23 年 6 月に経済チームを刷新(財務相と TCMB 総裁が交代)してからは、エルドアン大統領が TCMB の金融政策について発言することは少なくなりました。エルドアン大統領が経済チーム刷新前のように再び金融政策に干渉するようなら、トルコリラには下押し圧力が加わりそうです。〈八代〉

トルコリラ/円 (週足、2022/7-)

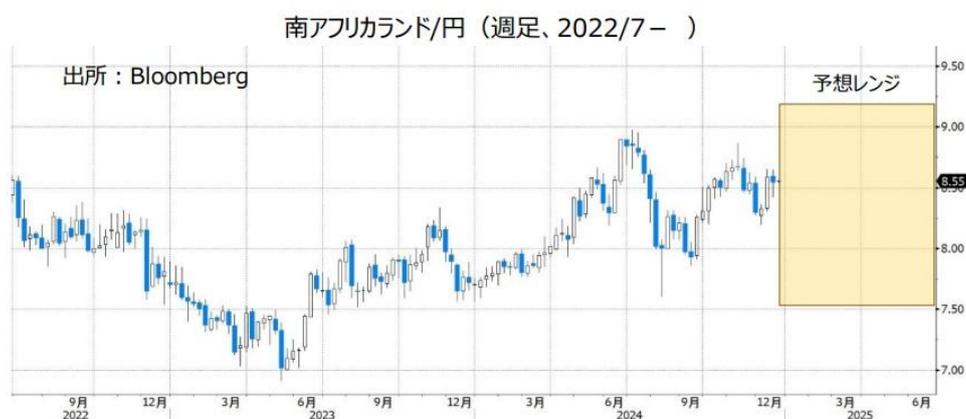


南アフリカランド/円: 7.500 円～9.200 円

SARB(南アフリカ中銀)は 24 年 9 月と 11 月の 2 会合連続で利下げを行いました(利下げ幅はいずれも 0.25%)。

南アフリカの 24 年 11 月 CPI(消費者物価指数)は前年比 2.9%と、SARB のインフレ目標(3～6%)を 2 カ月連続で下回り、目標中間値である 4.5%は 4 カ月連続で下回りました。SARB は今後さらに利下げすると考えられるものの、利下げのペースはこれまでの 0.25%が継続される可能性があります。仮に FRB の利下げペースが鈍化するなかで、SARB が大幅な利下げを行えば、南アフリカランドは対米ドルで下押し圧力が加わるおそれがあるからです。

南アフリカランド/円については、日銀が追加利上げを実施して SARB が利下げを継続したとしても、いずれもそのペースが緩やかならば、それほど下落しないかもしれません。〈八代〉



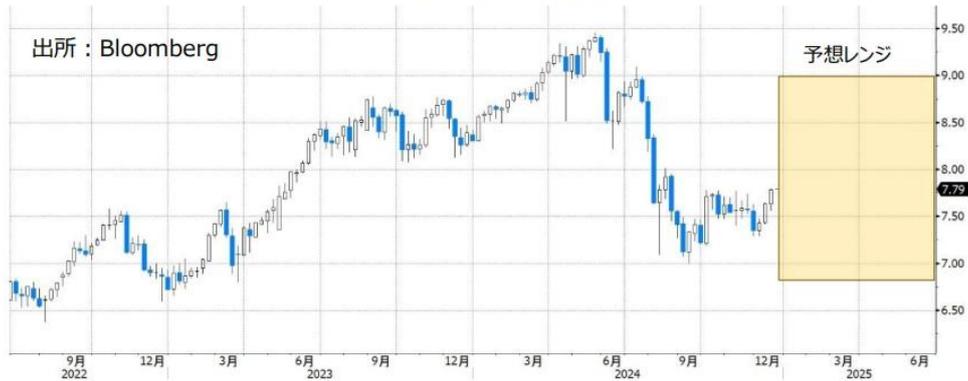
メキシコペソ/円: 6.800 円～9.000 円

BOM(メキシコ中銀)は 24 年 12 月 19 日の政策会合で 0.25%の利下げを行うことを決定。政策金利を 10.25%から 10.00%へと引き下げました。利下げは 4 会合連続です。

12 月会合時の声明では、「政策金利のさらなる調整(追加利下げ)が可能になると予想している」と改めて表明されました。また、新たに「デイスインフレの進展を踏まえ、抑制的な金融政策スタンスを維持しつつも、今後の会合ではより大幅な下方調整が検討される可能性もある」が追加され、今後 0.25%を超える幅の利下げもあり得ることが示唆されました。これらはメキシコペソにとってマイナスと考えられるものの、日銀の追加利上げのペースが緩やかならば、メキシコペソ/円に関しては他のクロス円と同様にそれほど下落しない可能性があります。

カナダドルと同じくトランプ米次期大統領の政策には要注意です。トランプ氏は、25 年 1 月 20 日の大統領就任後ただちにメキシコとカナダからの輸入する製品すべてに 25%の関税を課す考えを示しています。実際に対メキシコ関税が発動されればメキシコペソには下押し圧力が加わると見られる一方、関税の発動が見送られれば、メキシコペソ高材料になりそうです。〈八代〉

メキシコペソ/円 (週足、2022/7-)



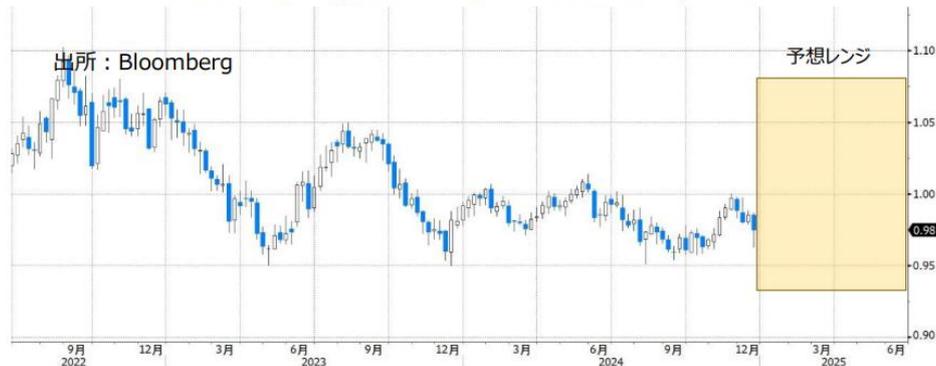
ノルウェークローネ/スウェーデンクローナ:0.93000S クローナ~1.08000S クローナ

24 年はノルウェーとスウェーデンの金融政策に大きな差が出ました。リクスバンク(スウェーデン中銀)は 5 月に利下げを開始し、政策金利は年初の 4%から年末に 2.50%まで低下しました。一方、ノルゲバンク(ノルウェー中銀)は 23 年 12 月に政策金利を 4.50%まで引き上げ、24 年を通してその水準を維持しました。

25 年は、ノルゲバンクも利下げを開始する見通しです。そうしたなかでも序盤は政策金利差(スウェーデン<ノルウェー)の拡大が予想され、引き続き N クローネにプラスとなりそうです。ただ、ノルゲバンクの「据え置き⇒利下げ」は金融政策の転換であり、転換時においては N クローネの下落圧力を生みそうです。また、年央にかけてリクスバンクの政策金利が中立水準に接近することで、打ち止め観測が浮上するかもしれません。

N クローネ/S クローナ(NOK/SEK)については、ノルウェーが産油国であるため、原油価格の動向も重要。中国をはじめとする世界経済の減速が一段の需要鈍化をもたらすのか(原油安=N クローネ安要因)、中東情勢の緊迫化が原油価格の上昇(=N クローネ高要因)につながるのか、見極める必要があります。<西田>

ノルウェークローネ/スウェーデンクローナ (週足、2022/7-)



今週の主要経済指標・イベント

			当社予想	市場予想	前回値
12月23日	24:00	【米】消費者信頼感指数(12月)	110.0	113.0	111.7
12月24日		【スウェーデン】祝日			
	9:30	【豪】RBA議事録(12月9-10日会合分)			
12月25日		【米】【英】【独】【カナダ】【豪】【NZ】【南アフリカ】【メキシコ】【ノルウェー】【スウェーデン】祝日			
		【日】植田日銀総裁の講演(経団連)			
12月26日		【英】【独】【カナダ】【豪】【NZ】【南アフリカ】【ノルウェー】【スウェーデン】祝日			
	20:00	【トルコ】TCMB政策金利	48.50%	48.25%	50.00%
12月27日	08:50	【日】金融政策決定会合における主な意見(12月18-19日開催分)			

市場予想はBloomberg、12月23日9:00現在。発表日時は日本時間。

<執筆者>

執筆者プロフィール



西田 明弘(にしだ あきひろ)

市場調査部 チーフエコノミスト

日興リサーチセンター、米ブルッキングス研究所、三菱UFJモルガンスタンレー証券などを経て、2012年マネースクウェア・ジャパン(現マネースクエア)入社。

米国を中心とした各国のマクロ経済・金融政策・政治動向の分析に携わる。

「アナリスト、ストラテジスト、エコノミスト、研究者と呼び名は変われども、30年以上一貫してリサーチ業務を行ってきました。長い経験を通じて学んだことは、金融市場では何が起きても不思議ではないということ。その経験を少しでも皆さんと共有したいと思います。」

執筆者プロフィール



八代 和也(やしろ かずや)

シニアアナリスト

2001年ひまわり証券入社後、為替関連の市況ニュースの配信、レポートの執筆などFX業務に携わる。2011年、マネースクウェア・ジャパン(現マネースクエア)に入社。

豪ドル、NZドル、カナダドル、トルコリラ、南アフリカランド、メキシコペソを中心に分析し、レポート執筆のほか、M2TV出演、セミナー講師を務めている。

【プロフィール】 広島県出身。

【趣味】 野球・サッカー観戦。

【一言】 より分かりやすくタイムリーなレポートを心掛けています。

※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。

また、相場の行方を保証するものではありません。

お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
